

障害支援のあり方

和洋国府台女子中学校 三年 二葉 彩花

私には、生まれながらにダウン症という障害を持つ兄がいる。個人差はあるが、ダウン症は運動能力、言語能力、認知能力など、発達の遅れが出てしまう。私は小さい頃から、そんな兄と兄を見守る両親を見てきた。兄の苦手なこと、得意なこと、決して得意ではないけれど好きなこと、近くにいるからこそわかることがある。

私が小学五年生の時、土曜日の授業参観に母と兄が来てくれたことがある。その時、クラスメイトの数人が、兄を見てクスクス笑っていた。ほかにも「何あれ、ヤバ」という声も聞こえた。私はとても嫌な気持ちになったことを覚えている。私はその当時、兄に障害があることや、障害を持っている人に対して偏見を持つ人がいることを何となく理解していたが、このようなことはやはりあってはならないと思う。

一方で、障害者支援について、親切心からいろいろなことをやってくださる方もいる。しかし、障害を持った人への支援については、支援する側の“してあげたい支援”が、支援を受ける側にとって必ずしも“本当に必要な支援”となっているのか疑問に思うことがある。このことはすごく難しい問題だと思う。

“必要以上の支援”が障害を持つ人の社会的自立にとってマイナスであるとすれば、支援は受ける側に立ったものでなければならない。その人にとっての“必要最小限の支援”こそが大切なのもかもしれない。

私の兄を見ていると、まさにそのように感じることが多い。自分のことは自分でしたいと、兄は何でも自分でやろうとする。家族が手伝えればもっと早くできるような時でも、兄は自分でやろうとする。家でもいろいろな役割を担っているし、彼自身、自分を特別な存在ではなく、家族の一員として考えて行動しているのだ。そう考えると、障害を持った人には、まずは普通の人と同じように接し、必要最小限の支援をすることが本当の支援だと思う。

障害の有無によって差別するのはもちろん良くないが、逆に特別な存在（必要以上に社会的弱者）として見ることも、障害を持つ人たちにとっては良い環境とはいえないのかもしれない。

現在の社会を見渡してみると、障害を持つ人に対して多くの人は“無関心”であると思う。中には「怖い」、「迷惑」、「少し変わってる」といったネガティブなことを思い浮かべる人もいるからだろう。これは障害に対する本当の意味での理解が低いからだと考える。実際企業でも、障害者の雇用が進んでいないという。これは障害者への理解が少ないだけではなく、生産性を追求する企業にとって、障害者雇用は大きなリスク要因でもあるからだと思う。

では障害を持った人たちにとって、どんな環境、社会が望ましいのだろうか。兄が私と同じように家族の一員として日常を過ごしたいように、社会でもその一員として「やりがい」「生きがい」を持って生活したいのだと思う。仕事をするということは、社会に属することであり、働くことによって社会のためになっていると実感することなのだ。

私達は競争社会で生きているのは事実だが、学力も運動能力も人それぞれだ。国語は得意でも数学は苦手な人だっている。得意なことと不得意なこと、好きなことと嫌いなことも人それぞれで、これを個性と言う。

障害者にも個性があると考えすることはできないだろうか。答えは私にも分からない。でも、いろいろな人たちで“支え合う社会”になったら、素晴らしいことだと思う。そのために何より大切なことは、“互いを知ること”であり、“障害を知ること”なのだと思う。

“どんな支援が必要か”ではなく、まずはその人の“障害”について知ること。それが障害を持った人たちにとって、過ごしやすい社会につながるのだと思う。

最後に私たちが考えなければならないことが一つある。障害者の方たちには、生まれながらにして障害を持っている人と、交通事故などで障害を持ってしまった人がいる。私を含めて、誰もがそうなる可能性はある。あなたが将来、障害を持ってしまったら、どのような社会を望むのだろうか。